

「実習記録」に関する基礎的考察

—「社会福祉援助技術現場実習」関係文献の検討を通して—

樋澤吉彦

新潟青陵大学福祉心理学科

Research of the Field Placement Record

—Review of the Field Placement Article—

Yoshihiko Hizawa

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

The purpose of this research is to consider the concept framework of field placement record on the basis of the field placement article in order to establish the system of field placement guidance.

Firstly, I determined field placement as “the practice” that is composed of “subject”, “object”, “purpose” and “means” basis on Hiroshi Tsubokami’s Social work Relationship theory. Secondly, I supposed eight point of field placement record. It showed that the difference between “theory”, “field placement” and “practice” gradually turns up from such a record. In concluding, I proposed that field placement record becomes “the means” of field placement through writing such a record.

Key words

Field Placement Record, Field Placement, Means, Eight points, Difference of Three Phases

和文要旨

本稿は、社会福祉実習指導体系確立の一助となることを目的として、特に「実習記録」の概念枠組みについて社会福祉実習関係文献をもとに整理・検討したものである。

はじめに「社会福祉実習」を、坪上宏の所論を援用し、「主体」、「対象」、「目的」、「手段」からなる人間実践のひとつと捉えた。そのうち、人間の内在的な力が「外化」し、「事実化」した「手段」は、意味付与を行う「主体」としての「人間」と切り離せないことを示した。そのうえで、仮説として「実習記録」を記述する際の8つのポイントを提示し、このポイントをふまえた記録からは、①「理論」、②「理論」をふまえた実習生の行動、③現場実践、という3つの局面間それぞれの差異が徐々にあらわれることを示した。そして、実習生がこの3つの差異を「実習記録」により意識し、整理・検証し、さらに記録することにより、「実習記録」は必然的に実習の「手段」となり得ることを示した。

キーワード

実習記録、社会福祉実習、手段、8つのポイント、3つの差異

I. 緒言

1. 問題関心と本稿の目的

社会福祉士及び介護福祉士、また社会福祉主事養成の教育課程の見直しを目的として発足した「福祉専門職の教育課程に関する検討会」は、2000年（平成12年）3月に「福祉専門職の教育課程に関する検討会報告書」を発表した。本報告書では、社会福祉士教育課程の見直しの方向性として、相談援助の実際理解を深めるための実習教育の強化、またそのための実習施設との連携強化、学生に対する事前事後の実習指導の充実を挙げている。2000年（平成12年）の社会福祉士教育課程の改正では、「社会福祉援助技術現場実習」（180時間）に加えて「社会福祉援助技術現場実習指導」（90時間）が新たに位置づけられた。これらの動向を見ても分かるように、養成校側には養成課程における社会福祉実習及び実習事前・事後指導の更なる充実が求められている。

筆者は社会福祉実習教育に携わるなかで、大学・養成機関における社会福祉実習の事前・事後指導では、実習全般を通して学生が作成する「記録」の指導が比較的大きなウエイトを占めるのではないかと考えている。おそらくほとんどの大学・養成機関における実習指導は、グループあるいはゼミ形式による少人数制での指導が主流と考えられるが、この「実習記録」指導に関しては、それぞれの指導担当教員の裁量に任されることが多いようであり、またその指導に苦慮しているように思われる。「実習記録は重要である」ということが漠然と分かっているにしても、しかしなぜ重要なのか、何のために書くのか、どのように書けばよいのかということの統一的な枠組み構築の議論の不十分さが、「実習記録」指導の困難さに輪をかけているように思われる。

1988年（昭和63年）の旧厚生省社会局長による各都道府県知事あての通知「社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について」（1999年（平成11年）改正）を見ると、「実習記録」に関し

ては、「社会福祉援助技術現場実習」の留意点として『「実習記録ノート」については、単なる記録とならない様にあらかじめ学生に指導するとともに、その内容については、個別指導に十分生かすようにすること』（傍点筆者）とされ、また「社会福祉援助技術現場実習指導」の（注）として「社会福祉援助技術現場実習を効果的にすすめるため、実習生用の『実習指導マニュアル』及び『実習記録ノート』を作成し、実習指導に活用すること」と示されている。つまり「実習記録」については、各養成校において何らかの様式を整えることと、「単なる記録」ではなく何らかの視点を持った「意味のある記録」になるよう指導を行うことを言及しており、「実習記録」の重要性を示しているものの、「実習記録」の意義・目的、様式のモデル、活用方法等については各養成校（各実習指導教員）の裁量に任されていると言える。

そこで本稿では、社会福祉実習指導体系確立の一助となることを目的として、特に社会福祉実習における「実習記録」について、現在国内で刊行されている社会福祉実習関係文献をもとに概念整理を行いたい。

2. 研究方法

本稿は文献研究である。社会福祉実習に関する文献は、実習教育そのものを研究対象としたもの、学生向けテキストとして作成されたもの、実習指導担当者向け指導マニュアルとして作成されたもの、ある特定の施設・機関において作成・使用されていた社会福祉実習マニュアルを公に刊行したもの等がある。また社会福祉士をはじめ、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士等、対象となる学生の専攻別によっても各種文献がある。本稿では、2001年8月末日までに刊行されている、社会福祉士受験資格取得のための「社会福祉援助技術現場実習」に関する以下8文献を検討対象とした。

- ①『社会福祉実習』（1981）⁽¹⁾
- ②『社会福祉施設実習』（1982）⁽²⁾
- ③『社会福祉実習：その理解と計画』（1992）⁽³⁾
- ④『新・社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル』（1996）⁽⁴⁾

- ⑤『福祉実習の基礎と実際』(1997)⁽⁵⁾
- ⑥『三訂社会福祉実習』(1998)⁽⁶⁾
- ⑦『改訂福祉実習ハンドブック』(1999)⁽⁷⁾
- ⑧『社会福祉実習サブノート：はじめて実習生となるあなたへ』(2000)⁽⁸⁾

本稿では、はじめに社会福祉専門職養成課程における「社会福祉実習」について、上記文献をもとに「社会福祉実習」の定義を示したうえで、特にその意義・目的について概念整理を行った。さらに社会福祉における「記録」の目的についても概念整理を行った。そのうえで「実習記録」の意義・目的の基礎的考察を行い、仮説を提示した。

上記文献をみると、実習生が実習の全過程を通して作成する「記録」には、①実習の事前指導時に作成される記録（実習生個人票、実習計画書、実習先の概況、実習施設で行われる事前オリエンテーションの内容等）、②実習中に作成される記録（実習日誌、実習中特定の利用者に焦点を合わせた経過観察記録、レクリエーション及び行事実施計画書等）、③実習の事後指導時に作成される記録（実習のまとめ、実習報告書、継続研究レポート等）というように、大きく3種類に分けることができ、これら全ての総称を「実習記録」と呼ぶことができる。本稿では、特に「実習記録」全体のひとつとして位置づけられる「実習日誌」に焦点をあてて検討を行った。

なお上記8文献は全て共著であるが、本稿では各文献はそれぞれ統一見解に基づき執筆されていることを前提として稿を進めた。したがって本稿では、上記8文献を引用する際に限り巻末の注(9)以降は、<文献①、p.〇〇>のように筆者が付した文献番号と適宜ページのみ明示し、本文中においても特に引用部分の執筆者は明示していない。また人名敬称は略させていただいた。

Ⅱ. 「社会福祉実習」とは何か

「実習記録」について検討するには、その前提として「社会福祉実習」の位置づけを整理しておく必要がある。本節では、特に文献①、②、③、④、⑦における見解を中心に

「社会福祉実習」の定義及び意義・目的を整理する。

1. 「社会福祉実習」の定義

8文献のなかで、「社会福祉実習」について最もまとまった定義を示しているのは文献③である。本書では、社会福祉現場における実践の現実には「身体構造」、「身体技法・慣習的行動」、「経験」、「勘・骨・直観・センス」等のいわゆる「暗黙知」の構造により完全には知識化できず、またその実践の実際の運用を修得するには「経験（あるいは体験）」を通過しなければならないしそのほうが「効率的」であると述べ、この点を前提に「社会福祉実習」を以下のように定義している。

「社会福祉現場の担い手を養成するという社会福祉教育の大きな目標の一つを達成するために、ある専門的水準を有して実践されている福祉現場に参入することによって、それまでの間に修得してきた知識・技術・行動様式を統合的に応用し、そこで展開される自らの実践行動を現場の実践過程と照合することによって、新たな理解と実践行為の水準、つまり実践能力を獲得することを目指す過程⁽⁹⁾」。

文献③によるこの定義を「社会福祉実習」の「目的」、「主体」、「対象」、「方法」とに整理すると以下ようになる。すなわち、『社会福祉実習』とは、社会福祉実践者養成という社会福祉教育の大きな目標の一つを達成するために〔目的〕、社会福祉を学ぶ学生が〔主体〕、専門的水準を有して実践されている社会福祉現場において〔対象〕、学校で修得してきた知識・技術・行動様式をその実践現場で応用し、その際そこで展開される実習生の実践行動（脚色要因としての『暗黙知』に影響されている実習生を媒体とした『人間の動き』としてあらわれる『知識・技術・行動様式』）を実際の現場の実践過程と照合することによって〔方法〕、社会福祉の『知識・技術・行動様式』に対する新たな理解と実践能力の獲得を目指す過程。本稿ではひとまず、「社会福祉実習」をこのように定義しておく。

2. 「社会福祉実習」の意義・目的

それでは、「社会福祉実習」の具体的な意義・目的は何か。文献①では、「社会福祉実習」の意義として次の2点を挙げている。第1は、「福祉現場においては、ふだん抱いていた空想やロマンや理想とはおよそかけ離れたものであり、そこには、もっと泥臭いもの、目を覆いたくなるようなものなどの数々がある。それは社会問題として、つねに、福祉従事者は対処しなければならない社会福祉そのものの姿」であり、「これらのなまなましい現実に触れ、そしてそれらを冷静に受けとめる」ことである。第2は、「一定の実習生という枠内で体得した具体的福祉問題を、大学で習得した福祉基礎知識とに照らし合わせてみて有機的に結合させ、理論・実践の体系づくりを行うこと」である。

また本書ではこの2点の意義をふまえて、①「あくまでも実習生として、過去に蓄積されてきた基礎的抽象的な社会福祉知識をふまえつつも、現場における福祉実習を通して『現場における社会福祉』とはいったいかなるものかを実践の活動から体得すること」及び、②実習を通じた「自己の、真実の人間性づくりの営み」という2点の目的を挙げている。⁽¹¹⁾

文献②は保育過程および社会福祉過程に学ぶ学生を対象に、主に児童福祉関係の生活施設における実習を想定して執筆されている。本書では、『実習』とは、実際に習うというごとく本来実践（経験）による認識の蓄積と発展（広がり）を目的とするが、一方で学校で習得した知識を実際の場で検証するという意味も持つ。経験（実践）を通して理論を確かめ、また、理論化して、実践にかえしてゆくという相互作用である。このため、実習においては、毎日の実習内容（体験）を記録し、その経験の内省や分析をとおして客観化、一般化し、問題意識を醸成させることが大切である」としており、実習記録の役割を実習の目的にかかわらせて述べている。⁽¹²⁾

文献④は、日本社会事業学校連盟及び全国社会福祉協議会が、福祉現場の実習指導担当者向けに、実習指導マニュアルとして刊行した文献である。本書では、歴史的発展過程を

経て徐々に体系化されてきた社会福祉実践の専門的方法・技術の体系の実際を種々の現場実践に臨んで、ソーシャルワーカー達の動きを観察したり、ソーシャルワークの価値観の具体的な意味を理解したり、人・問題・状況を観察したり、対象者やその関係者に接したりすることにより、「諸理論の実務への適用」ということを理解すること、また実際にクライアントと接することによって自己理解の機会を与えられることに「社会福祉実習」の意義と目的があるとしている。⁽¹³⁾ そのうえで12点の具体的実習目標を提示している。⁽¹⁴⁾ この具体的実習目標は、職業倫理及び価値の実現に関する理解、援助計画立案技術、利用者と社会環境との調整を図る技術、集団過程の促進や地域組織化の促進技術にまでふみこんでいる。

文献⑦では「実習の目的」として、①「社会福祉の各分野への統合を深める」、②「すでに学んだ社会福祉の知識・理論を実習体験をとおして検証する」、③「根本的な目的」として「社会福祉の専門的・実践的力量と倫理とを体得したすぐれた実践者を育てる」、④「教育を行う立場」からの目的として、「社会福祉実践を担う社会福祉専門職の養成」、⑤「実践の過程を整理・文章化すること」とおした「実践体験の概念化・理論化の訓練」、⑥「わが国の社会福祉の政策動向と、援助実践の動向を学ぶ」という6点を挙げる。また「実習の具体的学習目標」として施設・期間の組織・機能・運営方針、職員の職種や人間関係形成の理解、利用者の福祉ニーズの理解等8点を挙げている。⁽¹⁵⁾

このように、ここでとりあげた文献を含め、8文献における「社会福祉実習」の意義・目的は多様な表現のもとに提示されているが、筆者は次の2点にまとめられると考える。すなわち第1の目的は、学校で学んだ社会福祉の知識を実際の社会福祉実践現場における実習を通して検証することであり、「社会福祉」を体系的に総体として学びとるということである。第2の目的は、社会福祉の実践能力を身につけた社会福祉専門職養成とそのための自己理解の契機とすることである。⁽¹⁶⁾

但し筆者は、前納⁽¹⁶⁾、谷口⁽¹⁷⁾、山井⁽¹⁸⁾らによって

指摘されているように、8文献から析出した上述の2点の目的は、そのどちらを重視するかによって、おのずと実習の位置づけや内容に差異があらわれると考えている。その差異は、「アカデミックな学術研究の場としてとらえるか、社会福祉に従事する職員の養成としてとらえるか」という現場実習の前提となる社会福祉教育のあり方についての差異⁽¹⁹⁾を基底にしている。このことは、特に大学教育課程における社会福祉専門教育の根源的な課題であると同時に、「資格」とその教育のあり方をめぐる課題でもあり、「社会福祉実習」の意義・目的を考える際に避けて通れる問題ではない。このことについては別稿においていずれ検討を行いたい。

3. 「手段」としての「実習記録」

上述のように「社会福祉実習」の定義及び意義・目的を整理したとき、「実習記録」は「社会福祉実習」の「手段」のひとつとして位置づけることができる。と考える。「手段」とは『広辞苑』によれば、「目的を達するための具体的なやり方。てだて」と定義されている。この定義をそのまま援用すると「実習記録」は合目的な「道具」としての様相を帯びてくる。しかし、「実習記録」を既存のものとして捉えるだけではなく、「記録する」という「行為」そのものまでを含めた概念として捉えたとき、当然そこには「道具」を使用する「人間」のすがたがあらわれてくる。このように「記録する」という人間の行為を含めて「実習記録」を位置づけたばあい、筆者は「手段」の意味について坪上の所論⁽²¹⁾が参考になると思われる。

坪上は社会福祉実践を、「個々の人間が目的を意識して自分の心身を働かせて何事かをなすことであり、そのことをとおして、周囲の世界と自分自身を何らかの意味で意識的に変化させること」という個々の人間実践として捉える。そしてこの実践を、「主体」、「対象」、「目的」、「手段」から構成される労働過程と重ね合わせ、「手段」を「労働」の契機として位置づける。「労働」には、「自分に内在する力を持って外の世界に働きかけてそれを変化させる」「外化」、「変化によってある

事実をつくる」「事実化」、「事実化したものを自らの作品として自覚する」「内在化」という三つの契機（あるいは過程）が含まれる。「手段」は人間が本来持っている可能的な力が「外化」し、「事実化」したものであり、その「手段」は現代市民社会において「疎外」の只中に生きる市民を結びつける「物事（モノ）」、「他者（ヒト）」、「記号（コトバ）」という三重の様相をとった「媒介」⁽²²⁾として存在している。

このように「外化」され「事実化」し、「物と人（関係を担う人）と言葉」という三つの姿をとった「手段」は、「主体」による意味付与により「自分の働きの延長」となり、はじめてまとまりを持ったものとして取り合わせられ、働きかけられ、「内在化」が可能となる。これが坪上の言う「手段」なのである。

「社会福祉実習」を、実習生を「主体」とした個々の人間実践と捉えたばあい、実習生は実習の「目的」に向かって、自分の働きの延長である様々な「手段」に意味付与を行い、何らかのまとまりのあるものとして、「対象」としての社会福祉現場に働きかけを行う。また、「実習生」というかたちをとった自分自身に対しても働きかけを行う。このように考えれば、「実習記録」も「手段」のひとつとして、「主体」である実習生自身の働きの延長として、「記録する」という行為により意味付与され、他の「手段」とともにまとまりのあるものとして取り合わせられることになる。そしてそこに全体としての「社会福祉実習」というひとつの人間実践があらわれることになる。

以上のように、「実習記録」を「社会福祉実習」の「手段」のひとつとして位置づけたとき、それでは「実習記録」には、何が、どのように記述されるべきなのか。また、それはなぜか。

Ⅲ. 「実習記録」とは何か

1. 社会福祉実践における「記録」

「実習記録」の検討に入る前に、ここで社会福祉実践における「記録」について若干の

整理をしておきたい。『広辞苑』によれば、「記録」とは「①のちに伝える必要から、事実を書きしるすこと。また、その文書。特に史料としての日記・部類記の類。②競技などの成績・結果。特に、その最高のもの。また、物事の状態・結果などを数値で表したものの。レコード」とされている⁽²³⁾。一方、「『ワーカーの記録』は、a. 業務の記録、b. 実践記録、c. 生活記録、さらにd. 実習記録、なども含まれる。他方、クライアントによって書かれた記録も重要なものであろう」という久保の指摘⁽²⁴⁾にあるように、「実習記録」は広義に捉えれば「ワーカーの記録」、すなわちいわゆるソーシャルワーク記録のひとつとして位置づけることができる。本節では社会福祉実践における「記録」の目的を中心に、Sheffield、Kagle、岡村、佐藤の見解についてのみ整理しておく。

Sheffieldの文献⁽²⁵⁾はソーシャルワークにおける記録を体系的に示した最も初期の文献のひとつである。内容は、「記録」をソーシャル・ケース・ヒストリーとしたうえで、いわゆる叙述体(narrative)を中心に構成されている。Sheffieldは「ソーシャル・ケース・ヒストリーは、それが寄与するであろう目的によってかたちづくられてきた」と述べ、ソーシャル・ケース・ヒストリーの目的について、①個々のクライアントに対する支援の効果的な促進という直接的目的、②社会全体の改良という本源的な目的、③ケースワーカー自身が批判的思考を構築していくという副次的目的、という3点を挙げている⁽²⁶⁾。そして特にクライアントに対する支援(treatment)に寄与することが第一義的な目的であるとしている⁽²⁷⁾。

Kagleの文献⁽²⁸⁾は、久保により「これまで出版されたソーシャルワークの記録の本では、もっとも包括的で、すぐれたもの⁽²⁹⁾」とされている。Kagleは、記録はソーシャルワークの重要な構成要素のひとつであり、クライアント、組織、及び専門職に対しての責任を焦点化したものであるとする。また、記録は実践の多様性を反映しており、サービスパターン、実践のアプローチ、組織の特徴等によって様々な形をとるが、焦点(focus)、範囲(scope)、

目的(purpose)、機能(functions)に分けて次のように定義している。すなわち「記録は、サービス提供の促進、あるいはクライアントを代弁するという目的のもと、クライアントの個別性と特徴、要求、状況、サービスに焦点をあわせ、目標、計画、実践をクライアント、要求、状況の事前評価と利用可能な資源に結びつける。また、記録することは必然的に、再検討、選択、分析、情報の組織化を行わせると同時に、記録すること自体、クライアントとのコミュニケーションのための重要な資源となる⁽³⁰⁾」。

また記録の活用の目的として、①クライアントとクライアントのニーズを確定させるため、②サービスの証拠のため、③ケース継続のため、④クライアントへの他の提供サービスとのコミュニケーションのため、⑤スーパービジョン、コンサルテーション、ピア・レビューのため、⑥クライアントと情報を共有するため、⑦サービスの過程と影響を評価するため、⑧教育のため、⑨管理上の意思決定のため、⑩調査・研究のため、の10点を挙げている⁽³¹⁾。

Kagleはまた、別の論文において記録の情報は社会福祉従事者、スーパーバイザー、コンサルタントや機関内の他の専門職だけでなく、裁判所、他のコミュニティ機関、管理・基金組織、マネジド・ケア・ネットワーク、認可されたグループにまで活用されるものとしている⁽³²⁾。

わが国の「記録」に関する代表的なものとしては岡村の文献⁽³³⁾を挙げることができる。本書は「はしがき」でも述べられているように、Hamiltonの文献⁽³⁴⁾を基礎に執筆されたものである。

岡村は本書において「なぜケース記録は必要か」ということについて、①社会福祉の援助方法の進歩、②社会福祉の専門職業化の2点を挙げる。さらに記録活用の具体的目的として、①ケースの動きを第三者に理解させる、②機関、施設の経営、管理を向上させる、③教育と研究に役立つようにする、という3点を挙げる⁽³⁵⁾。

また本書で岡村は記録の記述様式として、Hamiltonに依拠しながら、①叙述(文)体

(narrative style)、②要約(文)体(summary style (Hamiltonの著書ではsummarized style))、③説明(文)体(interpretation style (Hamiltonの著書ではinterpretive style))の3様式をとりあげ説明している。⁽³⁶⁾

この3者による「記録」の目的をみると、その第一義的な目的はクライアントに対するソーシャルワーク実践過程の促進にあることが分かる。

一方、佐藤は社会福祉におけるいわゆる「ケース記録」と対置するものとしての「実践記録」の意義について言及するが、その際「記録」を「公式の記録」と「非公式の記録」とに分け、「公式の記録」のひとつとして「ケース記録」を、また「非公式の記録」のひとつとして「実践記録」を位置づける。⁽³⁷⁾ そのうえで佐藤は「実践記録」を、「実践主体の何らかの自覚を伴う内的契機により、実践一般の本来の性格としての関係者相互の形成をふまえ、実践過程を対象化して書かれたもので、記録の中には主体間の相互形成過程が盛られているもの」と定義している。⁽³⁸⁾ この「実践記録」の概念は、実践主体の内的契機によって書かれるという点において、「実習記録」の意義・目的を検討する際に示唆するものを多く含んでいるように思われる。

この他、Timmsの研究や、わが国では『ソーシャルワーク研究』の特集、「実践記録研究会」による成果等がある。⁽³⁹⁾⁽⁴⁰⁾

2. 「実習記録」の意義・目的

「実習記録」については、文献に占めるページの割合に差があるものの、8文献すべてにおいてふれられている。本節では、特に文献②、③、⑤、⑥、⑧における「実習記録」の意義・目的を整理する。

文献②では、実習における「観察」と関連させて「実習記録」の意義を次のように述べる。「実習生は、見学実習、参加実習、総合実習等の全過程を通じて、みずから生活を共にしながら、たえず、生活の場での一連の事実(実態)を観察し、考察し、さらに検討をし、反省をくり返しながら、実習効果を上げるのである。そのためには正確な実習記録が重要な資料となる」。⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾ このように、「社会福祉

実習」を、観察—考察・検討—反省という一連の過程として捉え、「実習記録」をそのための重要な資料として位置づけている。

また、本書では「観察」の目的を、「施設内で具体的に展開される状況(中略)をありのままの姿で正確に把握」することにより、「今まで各自が机上で学習してきたことを通して描いている施設のイメージ、入所児(者)のイメージ、職員の職務といったものに修正を加え、具体的な実像をとらえることによって、実習期間中に実習生自身が対応しなければならぬ対象を明確にすることができ」、「実習参加への意欲が高められ」、「実習目標をたてることのできるようになる」こととしている。⁽⁴³⁾

この「観察」の視点として本書では、①「対象者の言動観察」、②「実習生自身とその人間関係の展開についての継続的観察」、③「実習生としての自己の在り方についてみずから感じたこと」の3点を挙げ、⁽⁴⁴⁾ どれだけこの3つに重点をおいた観察ができるかが、実習成果のポイントになると述べ、その可否を握るものを「実習記録」とするのである。

そのうえで本書では「実習記録」の具体的な目的として、①その日の実習の成果を実習生みずから総括的に整理すること、②実習生だけではなく実習指導者も実習生の学習内容が理解でき、助言、指導をするばあいの資料となること、という2点を挙げている。⁽⁴⁵⁾

文献③では、「実習中の記録(実習日誌・各種記録)」の意義について、①課題に沿った計画的実習のため、②クライアントの課題やワーカーの動き、また実習生自身の動きを客観的に観察する能力と、それを文章化する表現力を養うため、③日々の実践内容を記録し考察を加えることにより、全体の文脈のなかで捉え直すことを可能にするため、④実習経験は実習生に対し、今まで気づかなかった自己に直面させることになるが、それを記録することにより、現実を冷静に受け止め、さらに自己理解を深化させることを可能にするため、⑤実習指導担当者からの定期的な指導・助言を受けるための媒体として、⑥実習生の、実習による変容の足跡を振り返る資料として、⑦実習の成果を評価する際の重要な

資料として、という7点を挙げている⁽⁴⁶⁾。

文献⑤では「実習記録」の目的として、①今日1日の間に何を学び、何を考えて実習を行ったかということ記録するため、②今後の学習の指針として、③施設・機関の実習指導者による実習指導の資料にしてもらうため、④指導者からの助言等を得て、毎日の実習への取り組みを日々向上させるため、という4点の目的を挙げる⁽⁴⁷⁾。

文献⑥では、「実習記録」の意義を次の6点にまとめている⁽⁴⁸⁾。第1は「社会福祉の課題にそって把握した事実の整理」である。「実習記録」によりさまざまな事実を整理し、何を把握したのか明確にすることにより、実習の目的と課題にそった「豊かな気づきと考察」が可能になる。第2は「実習生の自己表現」である。「記録」とはそもそも「事実のすべて」というよりも、記録者による「ある判断にもとづく事実の選択」であるため、そこに「選択主体」としての記録者（実習生）の自己が表現される。それにより実習生は自己を見つめなおし、指導者も実習生に「出会う」ことができるようになるのである。第3は「思考の整理と総括」である。「実習記録」は、事前に学習した知識のみならず、実習を通して得た知識とも照らし合わせ、事実の関連性やその意味を明らかにし、それを理論的にまとめる力を養うものとなる。第4は「伝達の間」である。「実習記録」は実習生と実習指導者とのフィードバックし合う場としての意味を持つ。第5は「予測と次の行動計画」である。「実習記録」は、先の見通し、予測、次の行動計画を助けることに、またそれらが適切かどうかの指導を受けることにつながる。第6は「自己及び指導者による実習評価」である。「実習記録」は、評価の対象や手段のためだけではなく、「実習生が自己の実践をどう評価し、指導者の眼からみるとどうかを示す場」でもある。

文献⑧では、「実習ノート」を「書く」目的として次の3点にまとめている⁽⁴⁹⁾。第1は、「実習では、さまざまな『発見』を大切にするので、その発見したことを新鮮な感覚のまま書きとめ、それを日々蓄積していくことが、後の実習体験を振り返るうえで役に立つ」と

いうことである。第2は、実習ノートに対する実習指導担当者や教員のコメントを読むことで、自分の実習体験をさらに考えたり、自分の実習スタイルに対する職員や教員の意見を聞くことができるということである。第3は、「次の実習に取り組む際に、自分の課題を見つける絶好の材料になる」ということである。

IV. 考察 — 8つのポイントと3つの差異 —

各文献における「実習記録」の意義・目的を整理すると、実習生及び実習指導担当者それぞれにとっての意義・目的は次のようにまとめることができる。

すなわち実習生にとって「実習記録」の第1の目的は、記録することによりその日の実習内容の実際を整理・要約するということである（主に文献②、⑤、⑥）。そうすることにより実習課題と実際の実習内容を照らし合わせ、新たな実習課題を見出すことが可能になる。第2の目的は、毎日の実習内容、職員の動き、利用者の状況を客観的に把握・観察し、それを文章化する能力を養うためである（主に文献②、③）。このことは同時に、利用者の課題、施設・機関の位置づけ、それを取り囲む制度・政策といった全体のなかで、個々の実習経験を考察することが可能となり、施設・機関における個別実践を理解する契機となる。第3の目的は、記録することにより実習生自身の自己理解の契機とすることである（主に文献③、⑥）。実習は、学校で机に向かい講義を受けるのとは違い、社会福祉の生々しい現場実践をからだ全体で経験する機会である。そのような経験は、実習生に対し、否応なしに自分自身の本来の姿に直面させることとなるだろう。その自分のすがたをできるだけ冷静に整理して記述することは、新たな自己理解につながる。また文献⑥で述べているように、事実全体をできるだけ簡略に記録しようとするれば、必然的に記録する内容の選択が選択主体すなわち実習生によって行われ、そこには実習生の自己が表現されることになる。そうして作成された記録は、まさに実習生の「自己」そのものとなり、先

述のように「社会福祉実習」の「手段」のひとつとなる⁽⁵⁰⁾。

また実習指導担当者にとって「実習記録」の第1の目的は、実習生の学習状況、課題の到達度を把握する材料のひとつとすることである（主に文献②、③、⑤、⑥、⑧）。施設・機関の実習指導担当者は、実習生の日々の実際の動きと、実習生自身によって記述された記録から、実習生を総合的に評価し、必要があれば指導方針の再検討も行われることになる。第2には、第1の目的と関連するが、実習生と実習指導担当者との相互理解のための媒体としての役割を持つことである（主に文献⑥）。実習指導担当者にとって「実習記録」は、実習生に対する助言・指導の契機となり、そのひとつとして記録に対するコメントがある。実習生はコメントを読むことで反省し、勇気づけられ、新たな理解が可能となる。

筆者は、この「実習記録」の目的から次のことが仮説として析出されると考える。すなわち実習生が記述する「実習記録」は、①実践現場の様相、及び現場実践の実際、②利用者及び利用者の生活の様相、③実践現場をとりまく社会的環境（地域的特性及び制度・政策）の様相、④事実全体から「ある状況」を選択し記録した理由、⑤「ある状況」において行動する際に実習生が選択した（あるいは意識した）社会福祉実践「理論」、及びその「理論」を選択した理由、⑥実習生が選択した（あるいは意識した）「理論」をふまえての実習生の行動の実際、⑦実習生の行動の結果、⑧自身のとった行動に対して自分がいま考えていること、という8つのポイントに沿って記述されることになる⁽⁵¹⁾。このうち①～③の記録のポイントは、実習生にとっての「実習記録」の第1、2の目的、及び実習指導担当者にとっての第1の目的に比較的接続がよく、④～⑧は、実習生にとっての第3の目的、及び実習指導者にとっての第2の目的に比較的接続がよいポイントといえる。また厳密には②、③は①に包含されるポイントである。さらに、この8つのポイントをふまえた記録は、実習生による、実習生と施設利用者との相互作用過程の記録ともいえる。

この8点は「実習記録」を記述する際の「条件」ではなく、先程から述べているようにあくまで実習生が「実習記録」を記述する際の「ポイント」である。そのため「実習記録」にこの8点を必ず入れ込む必要はないと考える。また、⑤、⑥における「理論」についても、大学等で学んだ社会福祉援助技術に関する「理論」を気張って意識し、それを記述する必要はなく、そのとき実習生が何を考えて、なぜそのような行動をとったのかということ、実習生自身によりできるだけ正直に記述されれば良いと考える。

この8点をふまえた記録がほぼ毎日実習生自身の手により書かれることによって「実習記録」には、第1に社会福祉実践「理論」と実習生を媒体とした「人間の動き」としてあらわれる「理論」（すなわち実習生の行動）との差異、第2に実習生の行動と現場実践との差異、そして第3に「理論」と現場実践との差異、という3つの差異が徐々に記録上にあらわれることになる。先述した「社会福祉実習」の2点の目的に立ち返れば、実習生がこの徐々にあらわれる3つの差異を「実習記録」によって意識し、整理・検証し、さらに上述の8点のポイントをふまえて記録することにより、「実習記録」は必然的に「主体」としての実習生の「働きの延長」としての「社会福祉実習」の「手段」のひとつになると考える。そして、そのように記録された「実習記録」は、実際の現場実践の理解、及び「暗黙知」が自身の行動にどのように影響しているかを理解する契機となると同時に、社会福祉実践の「理論」に対する新たな理解を深めることにつながるのである。

V. 結語 —まとめと今後の研究課題—

以上、本稿では「社会福祉実習」における「実習記録」について、その意義・目的を中心に検討を行った。

本稿で筆者は、はじめに坪上の所論を援用して「社会福祉実習」を「主体」、「対象」、「目的」、「手段」からなる人間実践のひとつと捉え、そのうち、人間の内在的な力が「外化」し、「事実化」した「手段」は、意味付

与を行う「主体」としての「人間」と切り離せないことを示した。そのうえで仮説として「実習記録」を記述する際の8点のポイントを示し、このポイントをふまえた記録からは、①「理論」、②「理論」をふまえた実習生の行動、③現場実践、という3つの局面間それぞれの差異があらわれること示した。そして実習生が、この3つの差異を「実習記録」により意識し、整理・検証し、さらに記録することにより、「実習記録」は必然的に実習の「手段」となり得ることを示した。

最後に本稿をふまえて、社会福祉実習教育に関する筆者の今後の研究課題を述べておきたい。文献③では「実習記録」の課題として、①「実習記録」に限らず、社会福祉実践における「記録」全般についての意義がまだ十分には理解されていないため、今後は事例研究会、記録書式・方法の開発や、日常的に観察・記録の訓練を行うこと、②「実習記録」の活用方法が未確立の状況にあるため、「実習記録」を社会福祉実習の重要な一部分として確認することの2点を挙げている。⁽⁵²⁾ また岡は、大学を社会福祉教育実践の「現場」と位置づけ、大学教員の「教育者」としての実践の研究・公開の必要性を指摘する。その際、特に実習指導をテーマとした研究には学生の守秘義務に関する教育的制約と、時間的制約があるものの、可能であろうと思われる研究方法として「実習ノートの分析」、「授業のなかの実習指導の記録」、「福祉機関実習指導者との意見交換」、「(学生との 一筆者注)個別面接の記録」の4点を挙げている。⁽⁵³⁾ これらをふまえて、筆者は特に社会福祉実習教育研究に関して次の3点の研究課題を挙げておきたい。

1. 今回取り上げることができなかった「実習記録」の様式や具体的活用方法について、文献だけでなく、各養成校の例も含めて整理・検討を行うこと。
2. 主に筆者の勤務校における学生の記録を対象にしたケーススタディーを通して、本稿で筆者が提示した仮説の検証を行うこと。⁽⁵⁴⁾
3. 『社会福祉実習』の意義・目的のところでも述べたが、「社会福祉援助技

術現場実習」に限らず、わが国の社会福祉専門教育における「社会福祉実習」のあり方について検討を行うこと。

(注)

- (1) 原田信一・市瀬幸平・橋本泰子編『社会福祉実習』、相川書房(1981)。
- (2) 大塚達夫・保田井進・鈴木壽恵編『社会福祉施設実習』、ミネルヴァ書房(1982)。なお周知のとおり「社会福祉士及び介護福祉士法」が公布されたのは1987年(昭和62年)5月であり、「社会福祉援助技術現場実習」が各校で開始されたのは翌年4月以降である。文献①、②は法律制定以前に刊行されたものであるが、事実上「社会福祉援助技術現場実習」を見越した内容であるため、本稿の検討対象とした。
- (3) 大島侑・米本秀仁・北島清一編『社会福祉実習：その理解と計画』、海声社(1992)。
- (4) 日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会編『新・社会福祉施設〔現場実習〕指導マニュアル』、全国社会福祉協議会(1996)。
- (5) 福祉実習連絡協議会編『福祉実習の基礎と実際』、中央法規(1997)。
- (6) 宮田和明・川田誉音・米沢國吉・加藤幸雄・野口定久編『三訂社会福祉実習』、中央法規(1998)。なお、2000年に、福祉専門職教育課程の見直し、介護保険制度の導入及び社会福祉基礎構造改革の進行等にとまなう記述の追加と用語の変更を行った本書の改訂版が刊行されている。
- (7) 岡本榮一・小田兼三・竹内一夫・中島充洋・宮崎昭夫編『改訂福祉実習ハンドブック』、中央法規(1999)。
- (8) 社会福祉実習研究会編『社会福祉実習サブノート：はじめて実習生となるあなたへ』、中央法規(2000)。
- (9) 文献③、pp.19—20。
- (10) 文献①、pp.22—27。
- (11) 同上、pp.27—28。
- (12) 文献②、p.111。
- (13) 文献④、pp.12—13。
- (14) 同上、pp.18—21。
- (15) 文献⑦、pp.8—14。
- (16) 前納弘武「社会福祉教育と社会福祉実習：『実習』

- をめぐるとの基本的諸問題への接近」、『淑徳短期大学研究紀要』、20、pp.32-40 (1981)。同「短期大学における社会福祉教育の展開：その今日的状況の解説」、一番ヶ瀬康子・小川利夫他編『社会福祉の専門教育：シリーズ福祉教育第6巻』、pp.43-56、光生館 (1990)。
- (17) 谷口泰史「社会福祉実習の基本問題 (1)：わが国の『社会福祉実習論』の展開と今後の課題」、『社会問題研究 (大阪府立大学)』、46 (2)、pp.25-69 (1997)。
- (18) 山井理恵「社会福祉現場実習における学習達成に及ぼす要因：学生の評価からの分析」、『社会福祉実践理論研究』、7、pp.23-32 (1998)。同「社会福祉現場実習におけるスーパービジョン：配属機関がスーパービジョンに及ぼす効果」、『医療社会福祉研究』、7 (1)、pp.42-50 (1998)。
- (19) 山井、前掲書「社会福祉現場実習における学習達成に及ぼす要因：学生の評価からの分析」、p.23。
- (20) 新村出編『広辞苑第5版』、p.1281、岩波書店 (1998)。
- (21) 坪上の所論については、坪上宏・谷中輝雄・大野和男編『援助関係論を目指して：坪上宏の世界』、やどかり出版 (1998)、樋澤吉彦「坪上宏の援助関係論に内包する『変化』の意味についての一考察：『循環の関係』の検討を通して」、『社会福祉学』、42 (1)、pp.34-43、日本社会福祉学会 (2001)等を参照。
- (22) 坪上宏「社会福祉実践における『技術』の意味」、仲村優一監修／仲村優一・野坂勉編『社会福祉方法論講座Ⅰ 基本的枠組』、pp.251-273、誠信書房 (1981)。また人間の行為の「外化」、「事実化」、「内在化」については、山口節郎『社会と意味：メタ社会学アプローチ』、勁草書房 (1982)の第一章「虚偽意識論」、pp.2-44を、現代市民社会における「媒介」については、真木悠介「現代社会の存立構造：物象化・物神化・自己疎外」、『思想』(587)、pp.2-30 (1973)、同(見田宗介)『現代社会の理論』、岩波書店 (1996)を参照。
- (23) 新村出編『広辞苑第5版』、p.723、岩波書店 (1998)。
- (24) 久保絃章「ソーシャル・ワークにおける記録：『記録』研究の文献を中心として」、『ソーシャルワーク研究』、11 (2)、p.8 (1985)。
- (25) Sheffield, A.E., *The Social Case History: Its Construction and Content*, Russell Sage Foundation, 1920.
- (26) *Ibid.*, pp.5-6.
- (27) *Ibid.*, pp.19-20.
- (28) Kagle, J.D., *Social Work Records*, The Dorsey Press, 1984.
- (29) 久保、前掲書、p.5。
- (30) Kagle, J.D., *op.cit.*, p.1.
- (31) *Ibid.*, pp.2-4.
- (32) Kagle, J.D., "Recording", *Encyclopedia of Social Work 19th*, pp.2027-2028, National Association of Social Workers, 1995.
- (33) 岡村重夫『ケースワーク記録法：その原則と応用』、誠信書房 (1965)。
- (34) Hamilton, G., *Principles of Social Case Recording*, Columbia University Press, 1946.
- (35) 岡村、前掲書、pp.1-10。
- (36) 同上、pp.24-32。
- (37) 佐藤豊道「社会福祉実践における『実践』『記録』『実践記録』概念の検討」、『淑徳短期大学研究紀要』、21、p.27 (1982)。
- (38) 佐藤、前掲書、p.30。
- (39) Timms, N., *Recording in Social Work*, Routledge & Kegan Paul, 1972。(ノエル・ティムズ／久保絃章・佐藤豊道・佐藤あや子訳『ソーシャル・ワークの記録』、相川書房 (1989))
- (40) 『ソーシャルワーク研究』、11 (2) (1986)。
- (41) 実践記録研究会編『実践記録』1-30 (1970-2000、2000年末現在)。「実践記録研究会」の活動については、坪上宏「実践記録：その方法についての一考察」、前掲『ソーシャルワーク研究』、pp.36-41を参照。
- (42) 文献②、pp.136-137。
- (43) 同上、pp.137-138。
- (44) 同上、p.138。
- (45) 同上、pp.140-141。
- (46) 同上、pp.176-177。
- (47) 文献⑤、p.65。
- (48) 文献⑥、pp.164-165。
- (49) 文献⑧、pp.52-53。
- (50) しかし、例えば文献③では「社会福祉実習」の具体的目的のひとつに「援助者としての自己理解(あるいは自己覚知)に迫られる貴重な機会」ということを挙げているものの、これを「実習というものゝ貴重な副産物」であり「決して主目的ではない」と位置づけている (p.24)。また谷口も前掲書において、前納、佐藤の共同調査(前納、前掲

書「社会福祉教育と社会福祉実習：『実習』をめぐる基本的諸問題への接近」、及び佐藤豊道「実習体験の内実とその効果：『社会福祉実習の効果測定に関する意識調査』をめぐる」、『淑徳短期大学研究紀要』、20、pp.41—72（1981）によって示された「動機づけを確認する機会つまり専門職へのスクリーニングの機能」に対し、「現場の理論からは、このような機能を受け入れることはできない」としている（p.61）。8文献を見ても、「社会福祉実習」そのものを実習生の「自己理解の契機」とする点については文献ごとにその重きのおき方に微妙な違いが見られる。この点についての検討は今後の課題としたい。

(51) この8つのポイントは、次の「実践記録研究会」における「記録の8条件」を参考にした。

- ①ワーカーは問題状況をどうとらえ
- ②相手にそれをどう伝え
- ③伝えられたことを相手はどうとらえ
- ④そのとらえ方とそれにもとづく相手の動きを、ワーカーはどうとらえて次の段階に進もうとしたか
- ⑤実践者に記録化を促す問題意識
- ⑥所属機関・職員の都合
- ⑦社会・制度ならびに医療状況（治療法・疾病観等）と所属機関・職員との関係
- ⑧ソーシャル・ワークあるいは社会福祉に関する何らかの理論についての自覚（理論が既存のものであるか否かは問わない）

坪上、前掲書「学会報告とその後考えたこと：自己覚知・異和感・記録の条件」、pp.105—106。

(52) 文献③、pp.185—186。

(53) 岡知史「教育実践報告：大学での実習指導の研究手法」、『上智大学社会福祉研究』、通巻23、pp.36—39（1999）。

(54) 「実習記録」をデータとして用いた先行研究として、質的研究法のひとつであるグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、実習初期における「実習体験」プロセスの概念を提示した、深谷美枝「『実習体験』とは何か：発達障害施設における研究」、『人間の福祉（立正大学社会福祉学部紀要）』、1、pp.245—248（1997）がある。また、介護福祉士実習においてどれだけ「学び」ができたかということを、学生の実習報告会資料の記述内容の分析を通して検討した、松林優子・伊集院朋子「初めての施設実習における介護学生の学び

に関する研究：実習報告会資料の記述内容の分析」、『帝京平成短期大学紀要』、8、pp.85—88（1998）、松林優子「施設実習における介護学生の学びに関する研究：2段階実習報告会資料の記述内容の分析」、同上、9、pp.61—65（1999）がある。